

第3分科会記録

1 分科会の主題 「子どもたちを未来へ導く力：情報社会で生き抜く力を育む」

提案者・助言者 子どもとメディア信州 代表 松島 恒志
司 会 者 八坂小中学校 齊藤 武
記 録 者 大町市生涯学習課 日暮 花苗
世 話 係 大町人権擁護連絡委員会 江津 文人

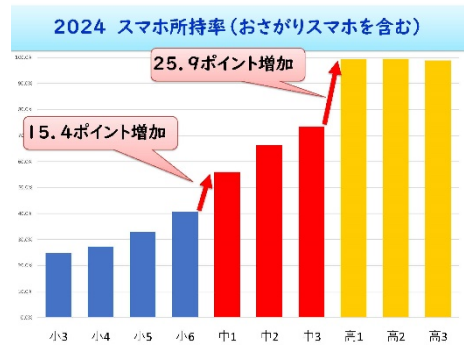
2 提案要旨

(1) 子どもの情報端末利用の実態

【スマホの所持率】

・「自分が使えるスマホを持っているか」のアンケート結果では、自分のスマホを持っている小学生は、学年が上がるごとに増えてきているが、全員が持っているわけではない。また、お下がりスマホを持っている子どもたちに着目してほしい。お下がりスマホは、親が使用していたスマホであり、今は使用していなくても携帯の契約会社やクレジット決済などが紐づいたままの可能性もある。また、不適切サイトなどへの閲覧制限（フィルタリング）がされていない可能性があるため、子どもに使用させるとトラブルの基になる。実際に何十万～何百万円の課金トラブルになった事例もあるため、特に注意してほしい。

・他の都道府県から10年ほど遅れて「スマホは中学生から」という考えになってきた。日々学校や保護者の方から子どものスマホのトラブルについて寄せられるが、特に多いのが中学1年生と高校1年生。グラフのとおり、新しくスマホを持った子ども達がトラブルを起こしやすい。そのため、中学1年生・高校3年生より、小学校6年生・中学校3年生の時にスマホの利用について重点的に指導する必要がある。



・スマホを1度持った子どもたちが手放すことはあり得ない。所持率は上がっていくのみ。なので、低学年の時点でスマホの所持率が高い学校は注意が必要であり、学校に指導することが大切である。

・現在、未満児が使えるゲーム機やタブレットの所持率も上がってきている。この時期は、親が一番子育てに夢中になる時期である。子どもが知らないことがあれば、自分で調べさせたり、親が忙しい時にゲームさせたりなど、子育ての1つの道具として利用する傾向が増えているため啓発が必要である。

【子どものスクリーンタイムの状況】

・休みの日を中心に電子メディアの使用時間に注目してみる。長野県の子どもは平均的にみると低いですが、なかには、一日10時間以上使っている子どももいる。このように長野県は二分化している。学年が上がるにつれ、10時間以上使っている子どもはさらに増えている。このように、中毒・依存になるとなかなか抜け出せず増え続けていく。

【情報端末の主な使用目的は何か】

アンケート結果

小学校 1位：動画 2位：ゲーム

中学校 1位：動画 2位：ゲーム・調べる・SNS

高校生 1位：SNS 2位：動画

- ・小中学生は「動画を見る」割合が多く、10年連続で1位となっている。子ども達はYouTube等動画を見るのが大好き。また、最近は音楽を聴くために使用している傾向も増えている。
- ・中学生になると調べ事で使うことが増える。実は大人も同じことをやっている。
- ・高校生になるとSNSでの利用が多い（動画も同じくらい多い）。SNSの利用でトラブルが多いのは「インスタグラム」である。インスタグラムは一人でいくつものアカウントを所持できるためトラブルの原因になりやすい。
- ・ゲームの9割はオンラインゲームである。中でも「バトルロワイアル」が主流となっている。
- ・ゲームの使用時間と学力について比較すると、ゲームを長時間やっているほど正答率は低くなっている。しかし、SNSや動画視聴時間等と正答率で比較すると、1・2時間使用している人の方が正答率が良い。
→自分で自分を律してコントロールしている子どもは成績が一番良い。上手に活用している子どもたちが力を発揮している。



(2) 情報端末の効果的な利用に向けた取り組み

【情報端末の利点と課題】

利点：①遠く離れた場所や人と繋がることができる ②数多くの情報から必要な情報を得られる ③広く情報を発信できる ④視覚聴覚をとおして関心を得やすい ⑤繰り返し・拡大縮小・加工ができる ⑥時間を戻す・止めることができる ⑦瞬時に計算・作図・立体化などができる ⑧個別の学習が可能 など

問題点：①文字を書く必要がない、話す必要がない ②考える時間が少ない、答えが求めやすい ③長時間の使用は疲れる、心身への影響がある ④映像で見ると実物では違う部分が多い ⑤微妙で繊細な感情表現が難しい ⑥コミュニケーションの質が違う ⑦視覚聴覚以外の五感 など

- ・ICT教育を推進するためには利点を生かし、課題部分はできる限り工夫することが必要。なんでも使えばいいわけではない。道具の1つであるということを理解してほしい。
- ・AIは、私たちの生活に浸透し始めている。私たちは知らず知らずのうちに利用しているため、もうAIのことを否定できない。AIは簡単に答えが出てしまい、考える力が失われていく。大人は子どもたちにこの機能をどうやって活用したらいいのかを指導してあげる。また、AIは間違えることがある。使い方を教えるときは、「このようにAIも間違える。だから確認が必要」と指導することが大事。そして、ただコピペ・引用するだけでなく、自分の考えを取り入れることを大切にしてほしい。

(3) 子どもの心を育てるには

- ・ ネットを介しての関りやオンラインゲームへの依存傾向を示す子どもが増える。

ゲームやライン等のトラブル・いじめ

人が困る顔で喜ぶ 人が泣いていることで満足する いじめられているのを見て喜ぶ

→ からかう 仲間はずれにする いじめる 相手が泣くまでやり続ける 等

→ やられた子はそれに対して… やられたらやり返してしまう

また、ゲーム内で起きたことが学校でも影響が出て、いじめの原因に

- ・ 「相手の気持ちを考える」「思いやる」などの人として持ってほしい「心」が崩れかけている状況が見える。
- ・ ゲーム等へ依存している子どもが増えることによって、保護者の方から「昼夜逆転」や「不登校傾向」についての相談が多い。保護者の方は改善しようとするため、取り上げたり、制限をしてしまうが、部屋にこもったり壁を壊すなど、更なるトラブルにつながってしまう。禁止事項は、今の子どもたちにとって意味をなさない。親ができる事は、子どもに「関わること」「関わらせること」が大切。一緒に何かをしてあげるだけで子どもは変わってくる。(一緒に料理する、一緒にDIYする等) 今こそ子どもたちへ前向きな働きかけが必要である。
- ・ デジタル時代の子どもはアナログの遊びにはまりやすい。(コマまわし、メンコ、花札など) 昔の遊びに詳しいおばあちゃんおじいちゃんと交流したり、地域の行事に積極的に参加してみる。手の込んだものをやらせなきゃと思いがちだが、単純でいい。
- ・ 子どもも大切だけど自分も大切と感じているから、子どもにタブレットやスマホを渡してしまう。自分を捨てても子どもに時間を費やすことで、数年後自分に返ってくるかも。忙しくて子どもにかかわれないのは、仕方ないことなのか。大切な我が子にもしものことがあったら…と思ひ浮かべてほしい。100%の親が私の命と引き換えていいと答えた。命を削ってまでしなくても、子どもたちと関わることはできる。「忙しい」を理由に子どもにかかわれないことを仕方なく考えないでほしい。スマホやゲーム機に任せないで、子どもたちに愛情を注いでほしい。子どもたちと共に過ごし、時間を共有してあげる。
- ・ コロナが終わり大人が子どもたちにどうかかわっていくのが課題になる。

3 協議 (グループ討議で出された意見)

(1) 子どもの情報端末利用の実態について

- ・ 自分の孫も親のお下がりスマホを使っている。注意が必要だと感じた。
- ・ 今は子どもの方が詳しい。親が気付かないうちに子どもに悪用されていたり、子どもも知らない間にトラブルに巻き込まれる可能性があるということ。再度自分の家庭はどうか確認してみたい。
- ・ 半分以上の子どもたちがスマホを持っていて、かなり浸透してきているように感じる。
- ・ 機械の使い方やモラルについて、保護者同士で作らないといけない。家族間で共有するのが大切。
- ・ ルールを決めてあげる。

(2) 情報端末の効果的な利用に向けた取り組み

- ・ツールとして使うのはいいが、逆に使われてしまっている気がする。
- ・便利さがある反面、困ることもある。
- ・自分たちが正しいことを知っていないといけない。
- ・体験・経験することが大切。

(3) 子どもの心を育てるには

- ・そのものに執着するのではなく、ほかの物を与えてあげる。それが依存症から抜け出すきっかけになる。
- ・今の親世代は私たち（年配者）の責任。教育が変わりつつある。
- ・ちょっとしたことでもきっかけを与えてあげることが大切。



4 まとめ

- ・以前に比べ、情報端末を所持している児童生徒の割合は大きく増え、「スマホは中学生から」という形が定着してきた。そこで大切になってくるのが小学校6年生や中学3年生への早めの啓発である。これをどうするかが今後の一番の課題である。
- ・情報端末はとても便利な物で、使ってはいけないわけではない。便利に使えば、生活をとて豊かにするものである。自分で自分を律してコントロールして使うことが大切であり、情報端末はツール(道具・方法)として活用する。
- ・子ども達に前向きな働きかけが必要である。「～してはいけない」と言われ続けてきた子ども達に「～しよう」というような声をかけてあげる。また、「一緒に料理しよう」「外に遊びに行こう」のように親が子どもにかかわってあげることが重要である。これらは、情報端末への依存や昼夜逆転などの生活リズムの乱れ、不登校の防止対策にもつながる。
- ・今後も学校・家庭・地域が手を取り合って悩みを共有し解決に向けて取り組めればと思う。

